

## 清水義範論

和田 勉

一

清水の二百冊に及ぶ著作の中から、遺伝子に関わるテーマが採り上げられている『銀河がこのようにあるために』（平12、早川書房）と『遺伝子インフェルノ』（平16、幻冬舎）を中心に考察したい。

『サイエンス言誤学』（平13、朝日新聞社）の中でも「遺伝子」の項目を設け、「20世紀の3大事件<sup>中1</sup>」の一つに、「遺伝子の発見」を挙げている。そして、「遺伝子操作という技術で、これからはウリのつるにナスビをならすことができるようになるかもしれない、というところまで来ているわけだ。20世紀人はそんなところまでやってきた。それはそれで、生命を人の手でどこまでいじってよいのか、という倫理的問題を含んでいる。ところが、

私にはそのこととは別に、最近危惧していることがあるのだ。この頃どうも、遺伝子ということばが、非常に気分的に使われる傾向があるような気がする。科学的ではなく、迷信的遺伝子とでもいうものが生まれかけている。（中略）新しい迷信、インチキ宗教家のよまいごと、通俗運命論、みたいなものが、この先大いに出てくるような気がして心配なのだ」と述べている<sup>中2</sup>。「ヒトゲノム」の項目では、「人間を形成している情報は遺伝子にあり、そのすべてが解明されるというんだから、生物としての人間の構造がすべてわかってしまうということなのかと思っ

ていた」が、「遺伝子の働きがすべてわかったって、人間がなぜこうなのか、がわかるわけではないのだ。（中略）人間ってものの謎がすべて解ける時なんて来ないであろう」と述べている<sup>中3</sup>。現代社会と文学との関わりも複雑になっており、文学も文学研究も多様化している。遺伝子工学などで展開される学説も、遺伝子組み換えや遺伝子操作などを通して次第に日常的な言説として一般化しつつあるが、それらを取り込んだ文学作品として分析するのみならず、隣接諸科学を援用することで解明したい。ただし、分子生物学などから文学への単なる影響関係を指摘するのではなく、個別の文学言説それ自体が形成する文学作品の質の解明をねらいとする。小説の言語を問うことは小説を成り立たせている言語の諸要素の構造を考察し、小説とは何かを問うことでもある。小説を成り立たせているのは言語の織り

なす物語の意味行為であるが、先に挙げた清水の二作品における言語は、日常の近くにありながら科学的な言説を積極的に取り込んでいる。時代の最先端の問題にアクチュアルに関わり、それを文学的な想像力を交えて表出する清水の文学が持つ問題は、広く同時代のパラダイムとして共有すべきであると思われる。

『世にも珍妙な物語集』（平13、講談社）の「あとがき」で、清水は、「私は小説というものをすべてを愛好しているので、いろいろと幅広く書いていきたい、と思っっている。本当は、人々に、あの人はああいう作家、と認知されるためには、何でも書くというのは不利なのだが、いろいろ書きたくなってしまっている。そんなわけで私は、ユーモア系の推理小説も書いている。時代小説もたまに書く。ふいにSFを書いてみたりもする。ちよつとシリウスに現代人のゆがみを書いてみたり、歴史パロディを書いてみたり、昭和の家族史を書いてみたり」と記している。また、『清水義範ができるまで』（平13、大和書房）の「科学する小説」の中で、清水は「私は、小説を書くにしろ読むにしろ、今や、科学を意識していることがとても大切ではないかと思うのだ。（中略）現代の小説は、科学的な思考法や、科学への視点を持っていてしかるべきではないのか」と述べている。

更に、「私としては、人間というものを理解する補助として、もう少し科学的な勉強をしていきたいなど、思うのである。そし

て科学の面白さを、小説の中に生かせたらと願っている」と述べている。清水の作品では、随所に科学的な言説が陰に陽に織り込まれている。作中人物の台詞を用いたりしながら、科学的な問題を巧みに変奏している。科学的な内容を積極的に文学に取り込む清水の活動は、科学というものに対するイメージにも揺さぶりをかけている。このように科学と文学の境界線に立つた時、人文科学と自然科学という知の領域は生産的な対話を可能とするだろう。

ところで、多様な文学活動をしている清水ではあるが、研究については、真正面から取り扱われることはほとんどなかった。それは、ユーモア小説や大衆小説を多く書いているために、評価が定まっていけないことにも因るだろう。堤玄太は清水義範について、浅井清他編『新研究資料現代日本文学第二巻 小説II』（平12、明治書院）の中で、「現在の段階では先行研究は皆無という状態である。しかし、パステイッシュ、パロディの系譜という文学的観点、文体論の視点などさまざまな角度から論ずるだけの価値のある作家であると考えられる」と記している。また、「国文学」（平8・8）の特集「戦後生まれの現代作家のキーワード」の中で、清水良典が「パステイッシュ——清水義範」で、「パステイッシュ」を「同時代をとらえる必須のアイテム」と述べている。清水良典は『最後の文芸時評——90年代日本文学総ざらい』（平11、四谷ラウンド）の中でも、「一つの時代の

文化が爛熟して様式が煮詰まってしまったとき、新しい様式を編み出す方向と逆に、古い様式を皮肉や滑稽の材料にする『パロディ』や、スタイルを模写して戯れる『パステイッシュ』が生まれやすくなる。現代はちょうど、そういう時代である。たとえば『パステイッシュ』を専門とする清水義範のような作家がいる」と述べている。清水義範は『パステイッシュと透明人間』（平4、実業之日本社）の中で、「パロディとパステイッシュはどこが違うのだ、と言われるとうまく返答できない。パロディというものには風刺の精神やある種の毒があるものだが、私の書くものにはそれが薄<sup>注4</sup>いと記している。更に「物真似の面白さ」の他に、「ごく普通の市井の人物を、よく観察してみるといういろいろ面白くて、からかうわけじゃないけどちよつと物真似しちゃう、という気持<sup>注5</sup>」もあると述べている。先行研究では清水をパステイッシュという観点から捉えるものが目立つが、本稿では遺伝子という観点から清水を見ていきたい。

## 二

まず『銀河がこのようにあるために』について分析したい。この作品では、西暦二〇九九年という未来社会を設定し、宇宙や脳科学や遺伝子や宗教などに基づいた世界が展開される。脳科学者の澤口之進とその恋人で宇宙物理学者の戸田寧美との間

に生まれた夢助は、虚穴性自己同一性障害、つまり無自我病の、世界で百七人目の子供だった。何があっても笑うことも泣くこともなく、ただ安らかな顔をしている。この子が生まれてきた理由とはいったい何なのか。澤口は、人間の脳は実は傾斜している、誤った認識をしており、無自我病児の脳の方がより完全に近くて、誤認識がないのではないかと考える。親としての感情は希薄であり、それは夢助が亡くなったシーンの悲しみの感情の乏しさにも示されている。大江健三郎の『個人的な体験』等の作品が、障害を持った子供のことを痛切に悩むのとは対照的であり、その意味では清水の作品は空想的であると言える。なお、百七と言う数字には、百八の煩惱がある人間を超越しているという意味が込められているのであろうが、無自我病児の無垢さが世界認識を凌駕するというところに、それほど説得力があるとは言えない。

『銀河がこのようにあるために』の巻頭には、「登場人物」が一覧表にして示されている。因みに『主な登場人物』（平3、実業之日本社）という小説の中で、「日本人作家による小説には、普通ついていないが、外国人作家の小説なんかによくついているのが、主な登場人物」という一覧表である。ミステリー系の小説には特によく見られるものだ。あれは、一応、便利なものである」と述べている。

「マルチ・マツチという男女関係がエリート層にはよく見られ

る。女性も男性も、何人もの異性と愛情関係で結ばれ、ひとつひとつの関係も同等に大事にしている」ということで、澤口と寧美もマルチ・マツチの仲である。マルチ・マツチとは結婚という形態をとらず、複数の異性との交際を公認する制度であり、男女の自由なつながりが実験的な試みとして示されている。マルチ・マツチという愛情関係によって男女の複雑なつながりがあるので、一覧表によって示すことは複雑な人間関係を描く上では効果的であり読者に対して親切ではあるが、その人物への先入観を持つてしまうので、小説としての醍醐味が削がれる面があることも否定できない。このような一覧表が必要ないくらいにまで、人物造形を徹底すべきであろう。なお、男女の「交際が始まった時に、お互いのIDデータを第三モードまで教えているのであり、そこにはDNA情報が含まれている」というように未来の恋愛の姿が示されている。

野呂遺伝子科学研究所の東山は、「新人と原人との混血がもし大いにあったのならば、今の我々のDNAの中には、原人から受け継いでいる部分があるはずじゃないか。つまり、その三つのゲノムの比較から、我々の中の原人の遺伝子を見つけないんだ」と言う。約五万年前の人類で、中国山東省で発見された人骨化石について、考古学者が化石溶洗法でDNAを取り出して調べたところ、旧人と新人の混血らしいと立証できた。従来は、原人と新人との混血はなかったという説の方が有力であった。こ

れは、進化についての定説を覆すような解析ということである。遺伝子科学者の野呂は考古学者のアイラ・マックレーンとの共同研究によって、原人のDNA解明を目指そうとする。東山は二十一世紀初頭に完了したヒトゲノム計画を踏まえて原人ゲノム計画を行い、遺伝子操作によって原人にまで先祖返りするという目論見を語る。

東山は、ドーキンスの『利己的な遺伝子』に対抗して、「おののく遺伝子」という仮説を立てる。つまり、「この世は遺伝子にとって必ずしも快適な楽園ではない。世界には遺伝子の存続を脅かす悪条件がいっぱいある。だから遺伝子は恐れおののいている」「おののく遺伝子は、人間の脳に作用して、人間に都合のいい錯覚を生み出しているのかもしれない」というのである。そして「時間の矢はおののく遺伝子のトリック」ではないかと疑問を持つ。「時間の矢」とは、「時間はなぜ過去から未来に流れるのか、という謎である。人間が認識する限りでは、時の流れはそのようなものであると見え」「おののく遺伝子は時間の矢というトリックで、人間に歴史を与え、進化や進歩という幻想を信じこませ、未来に向けて増殖する動機を植えつけている」と考える。

東山は、自分の二人の子供が生まれるに際して、「頭脳が優秀で、病気にかかりにくい体質にする」ような遺伝子操作をしたと言われている。いわゆるデザイナーチャイルドの問題である

が、そのこと自体が深く追究されているわけではない。また、遺伝子操作をしてペットとして手の上に乗る大きさのパンダを飼っている。澤口が「動物遺伝子操作禁止世界条約に反しているだろう」と言うが、東山は「あの条約に中国は調印していないだよ。だから中国にしかないパンダについては、あの条約は無効なんだ」と反論する。このように興味本位で遺伝子操作された動物を飼うことは、人間と同様にただ一度の生を生きている動物の苦痛にも鈍感であると言わざるを得まい。ただし、手乗りパンダというようなアイデア自体は斬新であるので、更に東山の思想や生活について掘り下げて明らかにしていれば、この時代やこの人物の可能性や限界も浮き彫りにされていたであろうと惜しまれる。

『銀河がこのようにあるために』では、二十一世紀末と言う近未来を設定することで、遺伝子工学や脳科学や宇宙物理学や新興宗教などによって影響される人類の未来を予測している。執筆された現在の時点における学問や社会現象を踏まえながら、それから百年後の姿を独自に類推し、イメージとして作り上げている。このような野心的な試みは評価できても、内容については問題もある。全能である夢助の超能力が、作品を展開する上であまりに都合よく用いられており、説得力に欠ける。それは、母親の危機を救う二つのシーンに顕著に示されている。その他にもストーリーの展開のために、あまりに安易に人物造形

がなされておき、例えば多重人格の三浦口ハナの場合である。口ハナには何人かの固有名詞で語れるような人格が住みついており、ストーリーの面白さはあるが、不自然であるとも言えるだろう。特に口ハナが連れ去られそうになった時にジム・スタントンの人格が変わってしまったというのは、あまりに作者の都合によって作品を展開していて、作品世界そのものの内なる必然性に欠けると言わざるを得まい。映画を好む清水が映画のようなドラマチックな展開を意図したのであるが、登場人物にリアリティが乏しいし、安易な勧善懲悪的な発想であると言えるだろう。

宇宙の変動と無自我病児との関わりという壮大な試み自体が効果的であったのかどうか疑問も残る。時間の矢という問題も含め、要は脳内における誤った認識に基づくもので、それが遺伝子にとつて都合のいいようにインプットされているのかもしれないということを言いたいのであろうが、それほど説得力があるだろうか。二十一世紀末という近未来を舞台に宇宙や脳などについての常識を根底から覆そうとする野心的な試みとその筆力は評価できるが、将来を予見する想像力の質については思いつきのレベルに留まるところもないとは言えない。そして、現在の人間が存在していること自体を、根底から問い返すような凄みがあれば、作品として更に深みを増したであろう。言葉のレトリックやイメージの面白さというところから、思想レベ

ルにまで掘り下げるべきであつただろう。そうでないと、読み物として一過性のものと遇されかねまい。

## 三

次に『遺伝子インフェルノ』について分析したい。この小説は平成十三年にマガジンハウスより刊行された『二重螺旋のミレニアム』が改題されたものであるが、題が改められた以外には文言の修正などは為されていない。改題について、「文庫版へのあとがき」の中で、清水は「新しい題名のほうが内容に則している」と述べており、改題の理由は、「二〇〇〇年が近づく頃から、ミレニアムという言葉が大流行していて、みんながその言葉にうんざりしていたから」ということである。

『遺伝子インフェルノ』は、二〇五〇年頃の人類の姿を予言する小説である。第一話「いかにして人類は絶滅すればよいのか」では、ドクター・ハロンとJSという実体があるかどうかも分からない二人が、人類が絶滅するあらゆる可能性を語り合う。その中で、核戦争や巨大隕石の地球への衝突などの他に、「人類が自らの手で自分たちを絶滅させる病原体を作り出すというバージョン」として、「遺伝子工学などの、バイオ・テクノロジの中から発生してしまう新しい病気」が挙げられる。「人間が、遺伝子レベルで生物をいじった時に考えられる最悪の事態です

ね。たとえば、プラスチックを分解する細菌を作るつもりであった実験から、人間の肉を分解してしまうウイルスができてしまうというような。そしてそれがものすごい伝染性を持つていたとすれば、人類は絶滅ですよ。バイオ・テクノロジには常にその危険性が含まれています」とある。<sup>注7</sup>第一話は、この作品全体のテーマであるバイオ・テクノロジの恐怖を伝える導的な役割を果たしている。ただし語り合う二人の登場人物の個性を意図的に消去することで、地球レベルの普遍的な課題であることを浮き彫りにしようとしたのであろうが、反面では登場人物に個性がないために、スローガンに墮してしまっている側面も否定できない。文学作品に導入された科学的言説が読者に違和感を与えずに受容されるためには、したたかな工夫が必要であろう。そうであつてこそ、文学作品はその科学が内在する思想を読者に伝え、読者の感情や感性を変容させる機能を果たすであろう。その意味では、この第一話は工夫に乏しいと言わざるを得まい。たとえ、第十話で「JS」が佐東巡哉用の「オペレーティング・システム名」で、「ドクター・ハロン」が「ハイパー二〇五〇の中のメイン頭脳のイメージ・イリュージョン」ということが明らかになっても、一話と十話のつながりも乏しく説得力に欠けるだろう。第一話では、佐東巡哉はコンピュータ内のJSとしてしか存在していないので、時間の順序からすれば亡くなった後、つまり作品の最後に置かれるべきであろう

が、あえて最初に置いて、これから起こる出来事の導入的な役割を果たそうとしたのであろう。

第二話「ブレイク・エイク」では、脳に有害な薬物が素材とされている。薬によってテレパシーの能力を持つことができるようになる反面、一睡もできないような副作用があり、犯罪に発展する。第三話「ビリー・ミリガン・ゲーム」では、脳に有害なゲームが採り上げられている。「ゲームで自分の中から別の人間を呼び出しているうちに、歯止めがきかなくなつて、自分が何人にも分裂してしま」い、壊れてしまう。ゲームによって多重人格にされてしまうのである。

第五話「ゲノムのすりきれ」に登場する宮崎舞駆は、遺伝を研究する機関に入つて研究医をしている。正確に言うると、「環境省遺伝科学研究所で、発生課に籍を置く医局医」であり、我が子を人工授精によつて遺伝子操作で得ようとする。「DNAのどのどの遺伝子がどんな遺伝情報を司っているのか、なんてことをつきとめていくんです。生物の設計図の解説、というふうに言つてもいいでしょう。昔、ヒトゲノム計画というのがあったんですが、あそこ（遺伝科学研究所——引用者注）は日本の機関としてそれに大きく貢献しました」とある。

世界遺伝学会議の決めた禁止条項に「反して、ヒトの受精卵への遺伝子操作をやつてみた、らしい。ある種の遺伝子を、望ましいものに変更する、という操作でしょうね。癌にかかりに

くくするとか、背を高くするだとか」という嫌疑がかかる。「悪魔の研究」だと非難された宮崎は、「新時代の到来ですよ。誰もが、我が子を得る時に、遺伝子バンクへ行つてショッピングをする時代になるんですよ。髪の色は金髪にしよう、とか、スレンダーな女の子がいい、いやグラマーがいい、なんてね。それが選べる時代になるんです。素晴らしいじゃないですか」と、むしろ居直る。科学によつて優性の人間として改良することを目指すべきだと言う。失笑するしかない真面目さで、科学的見解に依拠した自己の正当性を訴えれば訴えるほど、その過剰さが科学に寄りかかりすぎる主張を戯画化する効果を生んでいる。遺伝子操作に伴う差別や階級制などのマイナス面には一切触れておらず、そこに宮崎の限界も浮き彫りになっている。

第七話「フェードラ」では、若返りシステムによつて細胞が活性化し、予想外に若返っていた女が、DNA鑑定によつて犯人であることが明らかとなる。犯人であることの決め手として、DNA鑑定に拠ることが日常化している。

第八話「こんなじゃない別の自分」では、薬物によつて暗記能力を高めたり、改心させようとしたりしたが、それらにはいずれも副作用による障害を伴っていたということが描き出される。バイオ・テクノロジーの研究が暴走してしまう危険として、「キメラ生物」が挙げられている。そこには、「バイオ・テクノロジーがここまで進んだことは、考えようによつては、

人類が新しい危機に直面してるといふとき。生命をいじくれるようになってしまつて、かえつてそのせいで自分たちの生命を脅やかしてしまう可能性が出てきた」とある。

第九話「ステロイド・ウォーズ」のベストライフ研究所では、「遺伝子医療の精鋭や、生物医学の専門家、神経医学の重鎮なんてのが勢揃いして」おり、「若返りと、寿命の延長」の実験、つまり「生命つてものをいじくる悪魔の研究」が為されている。「世界保健機関が医療倫理の観点から禁止しているような研究もやっていると見た。つまりまあ、マッド・サイエンティストの実験室だ。それを狂つた大富豪が指揮している」ということである。六年も生き続ける鮎も、「遺伝子レベルでの操作だつたんじゃないか」「遺伝子をいじくつて、性ホルモンの分泌をコントロールして、成熟しない生物を作り出したんだ」と推測される。

実際に密かに調査すると、「あそこに、禁断のバイオ科学の実験台にされた人間が三人いる。(中略)遺伝子操作をされて、性ホルモンの分泌を止められているのだと思う。それによつて老化が止められるかどうかの実験台だ」ということである。「双子のように見える、四か月しか歳の離れていない兄弟だ。おそろく、調べてみれば遺伝子が全く同じだろう」ということで「クローン人間」が造られていただろ<sup>注10</sup>うことも判明する。更に榊原蔵戸は、心臓肥大症の持病を治すために、三人のクローン人間

の一人から臓器移植をしたのではないかと思われる。つまり、「まず、自分と同じ遺伝子の人間を生み出し、その臓器を移植して疾病を治療する。次に、遺伝子操作をして、不老長寿を手に入れる。ただし、それには性機能を喪失してしまう副次現象がある。そして、別人のように若返る」ということである。臓器移植というエゴイステイックな理由で、クローン人間が作られ、しかも自己の生存のためにそのクローン人間を道具として利用してしまう。「自分と同じ遺伝子を持った子の心臓なら、拒絶反応もない」のである。しかし、すべての人間に基本的人権が保障されていることが前提になつて成立している社会においては、クローン技術を用いてであつても、いったん生まれた子供は、一人の人間としての人権を持つはずである。ここには決して想像の世界の出来事ではないリアリティを伴つて、遺伝子操作の持つ危険性が予兆としてイメージ<sup>注11</sup>されている。つまり、科学を妄信し、科学にすぎる人物を描くことによつて、科学そのものを批判した文学ともなつている。ただし、清水本人に、もう少し苛烈な批評精神というものがあれば、生命倫理として更に掘り下げて問うべきであつただらう。具体的なイメージとして表出し得ているだけに、文明批判という要素をもう少し盛り込んでいればと惜しまれる。

榊原は長寿を手に入れた代わりに、生殖能力を失つた。「そうしたら……、細胞の中の、太古の回路が復活した、のだらう。



性がなくなつて……、アミーバの能力が、甦つたんだ。(中略) 分裂増殖だよ。体が、二つに割れて……、二匹になる」という現象を起こしてしまう。第九話が、質量共にこの作品の頂点と言つてよいだろう。それにしても、文学的想像力はクローンに對して、『フランケンシュタイン』のような悪夢の形で働き易いのだろうか。雌雄同体に戻ったから「分裂増殖」するようになったというのであろうが、これは生物学を踏まえた先祖返りというよりも怪奇なイメージを讀者に与えている。

この小説の全十話の各話は、寓意的で複数の視点の交錯によつて成り立っている。第四話「やすらぎのホーム」では老人ホームを舞台に密かに安楽死が為されているさまが描かれており、これは第九話で権力者が不老長寿を模索する姿と対照的である。第六話「ヴェレツジ」では文明を否定し、文明に触れることを禁じた村を舞台に、掟を破つて新しいものを求める若者の姿が描かれている。四話も六話も、文明社会に関わる生と死の話が展開されているが、これらが表題に関わる内容として有機的に絡み合つて構成されているとは必ずしも言えまい。「テクノロジーという怪物」が「人類を滅びに導いている」から、六話のよ様な文明を捨てた村が描かれたのであろうが、文明と非文明の差があまりに極端すぎるだろう。現代文明の悪しき側面は表題の『遺伝子インフェルノ』に込められており、「インフェルノ」とは地獄という意味であり、それは第九話に集約して示されて

いる。結末の第十話「誕生」では、亡くなった佐東のコンピュータ内での蘇生が描かれているが、付け足しの感は否めまい。バーチャルな生によつて、生と死の隔てが曖昧になっていることを描いたのであろうが、末尾の「コンピュータの第二の世紀が、こうして始まった」というのも安易な展開で説得力に欠けるし、あまりにも多くの題材を取り込みすぎたために、テーマを拡散させてしまったという点は否定できまい。全体として物語が線的に、時間的な展開のうちに進行するのではなく、多層的に展開しているところがこの作品の特質ではあるが、本筋の内容とそれほど関わらない内容も盛り込まれていると言えよう。

#### 四

以上の二編の他に、『博士の異常な発明』（平12、集英社）に収められた「異形のもの」や「グリーンマン」や「見果てぬ夢」などの短編も、遺伝子に関わる内容が描かれている。

「異形のもの」では、遺伝子操作という研究の危険性がテーマである。つまり、「キメラ生物の創造」の問題性が、博士の作り出した「翼のある猫」などのイメージとして具体的に描き出されている。ただし、作者によつて安易にストーリーを展開しすぎるといふ難点があるので、説得力には欠ける。特に「私」が博士の異常な発明を描き出すための視点人物でしかなく、生

身の登場人物としてのリアリティに欠ける。藤田博士にしても、いくら「私」から誘導されたとは言え、初対面の人に秘密を公表してしまうような人物では魅力に乏しいと言えよう。

「グリーンマン」では、アメリカの大富豪が「遺伝子工学、分子生物学、脳医学、免疫医学などのトップ科学者」を集めて研究所を設立し、その成果が葉緑体人間の創出であったということが描かれる。自らが葉緑体人間に変身することで、永遠に近い生命を得るという風刺的な寓話である。斬新なアイデアが展開されるが、植物になっても人間に意識を伝えられるところや欲望も継続して持っているところは、作者の都合によってストーリーを作りすぎると言えよう。

「見果てぬ夢」では、バイオ・テクノロジーの研究をしていた八十一歳の発明老人が、体内に不老物質を埋め込む手術をしてから三十五年後も老化しないという話である。斬新な発想によって、不老不死を手に入れた老人の姿が皮肉っぽく描かれており、そこには為すこともなく長生きすることの空しさが込められている。ただし、細胞の劣化を防ぐ方法を見つけたというところを、老人の記憶の曖昧さと重ねて描いているものも足りない。ストーリーの展開や登場人物の形象について、もう一ひねりあざとい仕掛けがほしい。

ところで、清水の作品では、特定の原典をパロディ風にもじることの他に、宇宙から遺伝子までの研究成果を情報として視

野に収めて、人間の営みすべてを茶化してしまうところがある。このように人間の社会自体を相対化する根底にあるのが、清水の人間観というよりも生命観あるいは宇宙観とも呼ぶべき思想であろう。遺伝子のように極小化するにせよ宇宙のように極大化するにせよ、極限化された視点を持つことによって、生物としての人間の活動を客観的にユーモラスに捉え得ている。しかも、脳科学や宇宙物理学や遺伝科学などの学者を主な登場人物とすることで、それぞれの分野の研究成果を参照すべきテクストとして作品の中に取り込むことを不自然でなく行っている。研究成果という情報を整理し再構成することは、真実に近づくことであると共に、虚構化の方法としても活用されていることを清水の作品は示している。ただし、台詞の箇所になると、科学的な言説が固い印象を与えて観念的であることも否定できない。

『もつとおもしろくても理科』に拠ると、瀬名秀明が「科学を利用して小説を書く時の、作家の心構えはどうあるべきなのだろうか」と問うたことに対して、清水は「SFは科学的に正しいことのみを書くべきなのかどうか（中略）私の考えは、小説には何を書いた方がいい」と答えている。清水は、文学におけるフィクションを、発明の一種と捉えていると思われるが、フィクション自体が現実そのものとどれほど拮抗するイメージを持ち得ているのが改めて問われねばなるまい。近未来を作品

の背景としていたために、現代そのものからの逸脱が積極的に為されている。だが、遺伝子操作など同時代の文化的なイデオロギーはまさに織物のようにテクストの内部に張り巡らされており、問われるべきなのは、作品世界そのものがどれほど現代文明そのものを逆照射し得ているかということであろう。例えば、クローン人間の是非を問うことなどは、人間や生命の本質を問うことに等しいだろう。こうした問題を考えるためには、医療、法律、宗教、哲学などさまざまな視点を含めて考察し、掘り下げた地点からのストーリーの展開が求められるだろう。ただし、戯画的に表現するところに清水の個性があり、シリアスに論じる必要はないというのであれば話は別である。清水は、自己の作品が読者にどのように読まれるかということを随分と意識しながら執筆していると思われる。作品は読者に享受される際には、作家自身の意図とは関わりなく対象化され続ける。だが、作者にとっても読者にとっても、最先端の科学と人間との関わりは、文学として切実なテーマであることは間違いないであろう。

生命科学は作家の想像力さえも越えるスピードで進展しており、近い将来、現代人の生活は大きく変貌する可能性すらあるだろう。そのような先端の科学技術の波に翻弄される個人が感じる葛藤や、予想される未来の出来事を具体的に描くには、小説は恰好の媒体だと言えるだろう。清水も二十一世紀という時

代をそのように捉えて自在に創作活動を行っているのだろう。もつとも、時代を先取りする先見性については、未だ「歴史」となっていないだけにその評価が定め難いのも事実である。

清水の遺伝子を素材とした小説では、多様な題材に興味を示しながら、二十一世紀を前に最もタイムリーな話題である遺伝子に関心を持つて採り上げたと思われる。ただし、物語の世界を作者がどのようにでも操れるという意識があるせいか、思うにまかせぬ現実の人生との乖離がありすぎるといふ難点は否定できまい。それに清水の三人称小説によく見られるのは、いわゆる全知の語り手、つまりすべてを知っている神のような語り手である。あらゆる視点を取り得て、他の登場人物の内面まで見透かすことのできる語り手＝作者の存在である。全能である作者は、登場人物の死を安易なまでに描いてしまいが、もう少し死の描き方については厳粛であつてもよいだろう。

遺伝子工学などの現代における新たな知見を踏まえて、人間の存在を独自に捉える清水の実験的な試みは注目に値する。人間はどこからやってきてどこに行こうとしているのかという問いが、そのまま現代文明そのものへの問いかけにもつながっているのである。このような論理的には解決不可能な問題に対して、物語という形式は有効に機能している。しかも、科学に忠実に作品を構築すればするだけ、小説からは生身の人間としてのリアリティが失われるだろうが、その弊害も一応は克服して

いる。ただし、ストーリーテラーとしての自己の才能を駆使しすぎるために、テーマそのものの持つ深さを追究する徹底さや心理などを含めた細部の描写に対する周到さに欠ける面があることは否定できまい。

注1 あとの二つは、「2度の原子爆弾の投下」と「アポロ11号による月着陸」を挙げている。

注2 メイワン・ホーの『遺伝子を操作する——ばら色の約束が悪夢に変わるとき』（平12、三交社）に拠ると、「今日、遺伝子探しはエスカレートし、肥満や躁鬱病、精神分裂病、アルコール依存症、同性愛、犯罪性、長寿新しもの好きの性格の遺伝子が発見されたという報告まである」が、その信憑性については問題も多いとのことである。いずれにしろ、このような遺伝子による通俗的な運命論が流行りかねないことを、清水は危惧しているのである。

注3 『マイミダス』（平3、毎日新聞社）の「超・新語辞典・追補」の中でも「遺伝子」の項目を設け、「すべて遺伝子のせい、という話がウケて、流行するのではないか。（中略）本来は科学的な一学説であるこの遺伝子の話題が、やけに人々の口に登る可能性も大いに考えられるのだ」と記している。

注4 安藤宏は「パロディとパステイッシュとはどこが違うのか」（『国文学』平7・5）の中で、「清水義範が『蕎麦ときしめん』（昭59）以来実践している、いわゆる『パステイッシュ小説』の試みは、従来の概念で言えばむしろパロディに近いもの」と述べている。また、吉田城は「パステイッシュ」（大浦康介編『文学をいかに語るか——方法論とトポス』平8、新曜社所収）の中で、パステイッシュの名手として清水を挙げている。

注5 『深夜の弁明』（昭63、実業之日本社）の「あとがき」で、「私は最近パステイッシュという言葉を自分なりに拡大解釈して使っており、その場合は特に何かの物真似でなくても、言葉とか文章というものの持つおかしさを描いたものを、パステイッシュとしている」と自己の考えを明示している。

注6 清水には、『映画でボクが勉強したこと』（平5、毎日新聞社）など映画に関する著作もある。清水は映画というメディアを意識しつつ創作を行っているのだから、ストーリーの展開を映像としてイメージしながら言語表現に置き換えていくメカニズムを説明することも意味があるだろう。

注7 「文明崩壊の日」（小説すばる）平11・6、のち『博士の異常な発明』に収録）にも、増殖する細菌がポリエチレンなどの合成樹脂を溶かし、文明が崩壊する姿が風刺的に描かれている。

注8 軽部征夫の『クロロンは悪魔の科学か 食糧・医薬・生命力——人類を救うバイオの先端科学』（平10、祥伝社）に拠ると、一九九七年にイギリスでクロロン羊が誕生した際に、欧米社会では「生命を人為的に作り出すなど、神（創造主）への冒瀆だ。クロロン研究は悪魔の科学か」というような宗教面からの批判があったとのことである。

注9 ジェームス・D・ワトソンは『DNA——すべてはここから始まった』（平15、講談社）の中で、「不正を是正するための」「生殖細胞の遺伝子治療を真剣に検討すべきだ」と述べている。また、上村芳郎は「クロロン人間の倫理」（平15、みすず書房）の中で、「重い遺伝病を避けるために、クロロン技術や遺伝子治療で、子どもの資質を選ぶという選択は、道徳的に非難されはしないだろう。しかしより優れた資質をもつ子どもを選ぶという優生学的な選択は、これと同じものではない」と述べ、優生思想に基づく遺伝子操作には批判的である。なお、響堂新は「クロロン人間」（平15、新潮社）の中で、「アメリカには、高学歴の男性会員の登録を売り物

にする民間の精子バンクがいくつも存在する。(中略)利用者は、文字どおりカタログを見て精子を選ぶわけだ」とアメリカの現状を説明している。

注10 『もつとおもしろくても理科』(平8、講談社)の中の「遺伝子とDNAと生物たち」の章でも、「誰だって考え、既にいくつものSF作品になっているのが、クローン人間である。はたしてクローン人間は作れるのであろうか。作ってしまったてよいのであろうか。いろいろと、哲学的な問題にまでつながっていくのである。遺伝子工学とは、実は生命を自在に操れる技術でもあるのだ。そこまで行ってしまう可能性をどうしても持っている。だから、どこまでならやってよいか、についてはかなり真面目に考え、哲学を持っていなければならない」と述べている。また、『博士の異常な発明』に収められた「史上最大の発明」の中に、「二十一世紀っていうのはものすごい時代になるかもしれないんだ。(中略)人間でクローンを造り出すことは今のところタブーとされているが、いつ誰がやってしまっても不思議はないところまで科学が来ているんだ」とある。更に、「我々がついに至り着いた二十一世紀というのは、『フランケンシュタイン』のモンスターも、『モロー博士の島』の改造動物も、ロボットも本当に出てきてしまうんだ。小説の中の、マッド・サイエンティストたちがやってきたことが、これから次々に現実のものになっていくのかもしれない」とある。

注11 メイワン・ホーの『遺伝子を操作する——ばら色の約束が悪夢に変わるとき』の中に、「一九九七年の一〇月には、ある科学者が頭のないカエルをつくったという報告が新聞に掲載されたが、彼の究極の目標は、移植用の臓器や組織をつくるための頭のないクローン人間をつくり出すことであるという。彼は、頭のない胎児は苦痛も感じないだろうから、倫理的な理由に基づく社会的反発を緩和できると考えたのだそうだが、本気で言っているとはとても信じられない。新しい技術を受け入れるにあたって

は、それがどんな未来にわれわれを連れていこうとしているかをよく検討しなければならぬ」とある。